airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

從易卜生筆下之「娜拉」來對照明治時代的媳婦處境－受到鷗外《半日》啟發進而聯想之

Brides in the Meiji Period Judged from 'Nora' of Ibsen: From the Motif of Ogai's "Hanjitsu"

doi:10.29714/TKJJ.201206.0003

淡江日本論叢, (25), 2012

作者/Author： 曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page： 31-55

出版日期/Publication Date：2012/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201206.0003

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

從易卜生筆下之「娜拉」來對照明治時代的媳婦處境
－受到鷗外《半日》啟發進而聯想之－

曾秋桂
淡江大學日文系教授

摘要

本論文是本人閱讀到鷗外『半日』(明治 42)中有一段對媳婦極度毀謗的文章，而引發的研究動機而成的結果。從易卜生筆下「娜拉」這位新女性影響下之明治末期的時代風氣中，來看明治時代的媳婦們處境與形象。為了釐清此問題，研究範圍鎖定在明治期末期四部小説作品：德冨蘆花《不如帰》(明治 31-32)、田山花袋《生》(明治 41)、森鷗外《半日》(明治 42)、夏目漱石《行人》(大正元年-2)等。

考察之後導出的結論如下：易卜生創作於明治 20 年代被引進日本，明治 36 年左右日本知識份子廣為閱讀易卜生創作，且蔚為風氣。而易卜生帶動女性自覺，是在明治 39 年以後才逐漸普及。在當中雖然蘆花不至於批判具有「娜拉」風格的女性，但並不認同「新女性」的生存之道。同時指引出「娜拉」風格的女性以外的一條女性生存之道。縱此，刊載於明治時期能夠廣為大眾流傳的新聞媒體的《不如帰》、《生》、《行人》中所描繪的媳婦們處境以及形象，皆是世間一般所言：媳婦是被婆婆壓榨的弱勢力群。相形之下《半日》中的媳婦，就顯得突兀許多。如此看來、「新女性」的出現，給日本社会或多或少帶來風潮的改變，但明治時代的婆媳糾葛問題仍是沒有消失。日本的「新女性」只能説是明治時代婆媳糾葛的一個反動勢力的跡象，對於媳婦們的處境與形象，仍是如往常一般。

關鍵字：易卜生　明治末期　媳婦　婆婆　新女性

airiti

Brides in the Meiji Period judged from ‘Nora’ of Ibsen:From the motif of Ogai’s " Hanjitsu "

Tseng, Chiu-kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper has used blame to the bride in Ogai "Hanjitsu" (Meiji 42) as the motif, and has decoded diachronically situations and shapes form on which the brides of the Meiji last tern were put. This paper has taken up the four works of Meiji term typical novel, Tokutomi Roka "Hototogisu" (Meiji 31-32), Tayama Katai "Sei" (Meiji 41), Mori Ougai "Hanjitsu" (Meiji 42) and Natsume Soseki "Koujin"(Taisho 1-2).

The fashion of Ibsen's works on the Japanese intellectuals was from around 1903(Meiji 36). After that recognition to female independence was going to be popular in Japan after 1906(Meiji 39). But wives of a novel in the Meiji period "Hototogisu", "Sei" and "Koujin" were made in the weak position and the existence oppressed by a mother-in-law. Japanese "new woman" was the reaction on which she appeared in the oppression in the family in modern Japanese age, and her standpoint was put the oppressed social standpoint.

Keyword: Ibsen, Meiji last tern, bride, mother-in-law, new woman

airiti

イプセンのノラから見た明治時代の嫁たち
―鷗外の『半日』に触発されて―

曽秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

本論文は、鷗外『半日』(明治 42 年)での嫁に対する最大級の非難に触発され、イプセンの影響を受けた明治末期の嫁たちの置かれた状況と形象を通時的に見ようとして、代表的な明治期小説、徳冨蘆花『不如帰』(明治 31-32)、田山花袋『生』(明治 41)、森鷗外『半日』(明治 42)、夏目漱石『行人』(大正元年-2)の 4 作品を取り上げて「嫁」像の解読を試みたものである。

結論としては、日本の知識人にイプセンの書物が流行り、広く読まれたのは、明治 36 年ぐらいからである。イプセンがきっかけとなって自立的女性像への認識が明治 39 年以後の日本では一種の了解になっていった。しかし、ノラ風の女性を批判するまでには至ってはいないが、「新しい女」には同調しない、別な生きる道があるという蘆花の見解も見られる。いずれにせよ、新聞メディアを媒介として世間に伝わった『不如帰』、『生』、『行人』で描かれた嫁たちは、通説の通り、弱い立場に立たされ、姑に抑圧された存在である。それに対して『半日』での嫁は姑を抑圧している。こうして見ると、「新しい女」の出現によって社会的思潮は少しは変化したが、明治時代の嫁たちにとって家族制度で上位に位置づけられた姑との葛藤状態が消滅したことはなかったであろう。日本の「新しい女」は、そうした葛藤状態の中で登場した一つの反作用ではあったが、現実社会で嫁の置かれた立場は従来通りだったと言わざるをえない。

キーワード：イプセン　明治末期　嫁　姑　新しい女

airiti

イプセンのノラから見た明治時代の嫁たち
―鷗外の『半日』に触発されて―

曽秋桂
淡江大学日本語文学科教授

１．はじめに

小倉左遷から東京の文壇に復帰した鷗外の文学的再出発作品とされた『半日』(明治 42)では、「東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」(P482)という最大級の非難の言葉を嫁に向けている。この言葉を「『半日』の奥さんの変調はいささか誇張されすぎているようだが、近代に触れた新しい女のカリカチュアライズにまぎれもない」と見た三好行雄の見解[1]に従えば、『半日』には明らかに明治末期の「新しい女」との繋がりを見出すことが出来る。イプセン[2]の劇『人形の家』のノラが日本の「新しい女」の源になったことは通説となっているが[3]、そうすると、現時点に立って、イプセンの影響を受けた明治末期の文壇では、明治時代の嫁たちの置かれた状況と形象を通時的に見ることは避けて通れない課題の一つになろう。

---

[1]三好行雄(1993・初 1978)『森鷗外・夏目漱石』筑摩書房 P39-40。それ以外に「『ノラ』の譯物が鷗外であることを知つてゐるだけに、どうもおかしみが込みあげて来る」ことを理由に、『半日』を「ユーモア小説」にした福永武彦(「鷗外その野心」1962『文芸』)もあれば、「「主人文科大学教授文学博士高山峻藏君」として紹介された冒頭と呼応し際立ち、アイロニカルな響きを示している。すなわち、当時第一級の知識人文学博士文科大学教授である高山がその知的能力を発揮できない状況に連れ出され、その無力ぶりがさらけ出され、その姿が〈語り手〉によって描き出されていたのである」としている田中実の説(「『半日』論――〈他者〉と〈近代天皇制〉」竹盛天雄編(1989)『別册國文學森鷗外必携』學燈社 P23)もある。

[2]明治期の資料では、殆ど「イブセン」と表記されているが、本論文では、資料引用以外に、現代の呼び方「イプセン」と統一している。

[3]南谷覺正(2006)「『人形の家』について―ジェンダー・イデオロギーと文学」『群馬大学社会情報学部研究論集』第 13 群馬大学社会情報学部 P190 では、「『人形の家』の初演と同じ年に、『青鞜』が創刊(～大正 5 年 2 月)され、所謂女性解放運動が、日本において現実のものとなってきた。興味深いのは、青鞜同人が「新しき女」たちの名を冠され、『人形の家』のノーラのイメージと連想されるようになっていったことである。そして、十分想像できることだが、ノーラも『青鞜』も、一部の同情・共感とともに、多くの反感や嘲笑をも惹起したのである」とある。

airiti

研究対象としては、代表的な明治期小説、徳冨蘆花『不如帰』(明治 31-32)、田山花袋『生』(明治 41)、森鷗外『半日』(明治 42)、夏目漱石『行人』(大正元年-2)を取り上げる。理由は以下の通りである。徳冨蘆花はデビュー作として姑嫁問題を描いた『不如帰』を『国民新聞』に連載し、「上流階級の女性の悲劇であったから、同情と憧憬との交錯した女性心理において大衆的成功を収めた」[4]とされ、同時に『不如帰』は長い間演劇としても親しまれ、社会に大きな反響を引き起こした。明治末期の「新しい女」の出現より前の時期に出来た作品であるが、嫁の形象を検証するには看過できない作品のため、本論文では『不如帰』から見ることにした。次に、「文壇的名聲を一擧に確立しただけではなく、日本のリアリズム文學の方向に重大な影響を與えた」[5]『蒲団』(明治 40)を作り、「自然主義の方向を決定づける重要な原因になった」[6]田山花袋にも、「皮剥の苦痛」[7]を伴いながら姑嫁問題を描いた『生』(明治 41、『読売新聞』掲載)がある。平野謙は『生』を、「花袋の最初の新聞小説として記念すべき作品であるだけでなく、いわば自然主義文学の闘将としての花袋の文壇的地位を確立させた意味においても記念すべき作品」[8]だと見ている。嫁の形象を通時的に検討する場合、「明治三十年代の花袋一家の家庭生活を描いて、日本の家族制度の實體にふれ、藤村の『家』の先鞭をつけた」[9]『生』を抜きにしては語れないため、研究対象に入れた。さらに、『半日』より後に出来た漱石の『行人』(『朝日新聞』掲載)は、『半日』と同様に姑嫁が同居している大学教授の家庭

[4](1969・初 1966)瀬沼茂樹「作品解説」『日本現代文學全集 17 徳冨蘆花集』講談社 P391
[5]平野謙(1969・初 1962)「作品解説」『日本現代文學全集 21 田山花袋集』講談社 P454
[6]吉田精一(1980・初 1978)「田山花袋」『筑摩現代文学大系 6 田山花袋國木田獨歩集』筑摩書房 P485
[7](1995)『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP189 に掲載してある、「東京三十年」(大正 6 年)の「『生』を書いた時分」の項目では、「『生』の題材に対する苦痛もかなり大きかった。兄も嫂もまだ生きていたので、それに対する解剖にも気がひけた。(中略)ことに死んだ母親に対する忌憚なき解剖が中でも一番私を苦しめた。母親に無限の同情を持ち、また無限の涙を注いだ私だけに、一層辛かった。モウパッサンのいわゆる『皮剥の苦痛』――そういうものを細かに私は味わせられた」とある。
[8]平野謙(1970)「解説」『日本の文学 8 田山花袋岩野泡鳴近松秋江』中央公論社 P518
[9]瀬沼茂樹(1969・初 1962)「田山花袋入門」『日本現代文學全集 21 田山花袋集』講談社 P464

airiti

事情を描いたもので、比較対象として取り上げた。

本論文の手順として、まず日本におけるイプセンの受容を概観し、研究対象とした明治期小説 4 作品の各作家のイプセンへの言及に触れる。次に研究対象の 4 作品に焦点を当てて、各作品における嫁の形象と姑との関係を分析する。最後に明治時代を通時的に見て、イプセンの摂取を背景にした嫁たちの形象を纏めることにする。

２．日本におけるイプセンの受容

まず、日本におけるイプセン(Henrik Ibsen 1828-1906)の受容を概観してみよう。藤木宏幸は「イプセン移入紹介時代」(明治 25 年、1892－明治 37.8、1904.1905)、「イプセン流行時代」(明治 39 年、1906－大正初期 1910 年代初め)、「イプセン再検討時代」(昭和 3 年、1928－昭和 10 前後、1935 前後)、「イプセン再評価時代」(昭和 31 年、1956－)の 4 期に分けて日本へのイプセン受容を整理した[10]。

鷗外は明治 22 年に日本で最初にイプセンの名前に言及した[11]とされているが、坪内逍遙は明治 25 年に「ヘンリック・イプセン」をもって日本に初めてイプセンを紹介したという[12]。翻訳については、高安月郊は『人形の家』(『一點紅』明治 26 年、1893、4、中絶)を最初に訳し、日本へ紹介したと中村都史子[13]は指摘している。その後明治 39 年(1906)5 月 23 日のイプセン没後をきっかけに、イプセン熱が日本で盛んになった[14]。その熱中の真っ最中に、小山内薫の自由劇場によるイプセンの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』が明治 42 年(11.27-28)に初演された。引き続いて、島村抱月は全 3

[10]日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大事典』第 4 巻講談社 P323-324
[11]中村都史子(1997)『日本のイプセン現象 1906-1916 年』九州大学出版会 P4 では、明治 22 年 11 月『しがらみ草紙』が取り上げられている。
[12]瓜生研二(1985)「鷗外のイプセン観の構造」『比較文学・文化論集』1 東京大学比較文学・文化研究会 P25
[13]中村都史子(1981)「日本初演の「人形の家」」『梅光女学院大学論集』14 梅光女学院大学 P65
[14]金子幸代(2006)「日本近代劇再考Ⅲ―イプセン劇と鷗外の「歌舞伎」―」『富山大学人文学部紀要』44 富山大学人文学部 P94

airiti

幕の訳(『早稲田文学』明治 43 年 1 月)を完成し[15]、それをもとに坪内逍遙が主宰していた文芸協会はイプセンの『人形の家』を明治 44 年 9 月に初演した。『人形の家』の初演後、鷗外は『ノラ』[16](大正 2.10)を翻訳し、刊行した。

また、日本で「新しい女」のリーダーと目された平塚らいてうは、若者の研究に役立たせるために、当時の単行本や新聞、雑誌から拾い集めたイプセン研究に関する日本の文献を、『青鞜』(明治 45.1)に付録として「ノラの合評号」に載せている[17]。それらの研究資料[18]を見た限り、イプセン熱は高安月郊の「イブセン社会劇」(明治 34.10)を以って嚆矢とし、明治 40 年代にそのピークを迎えたのである。これは、イプセン劇の日本での公演、日本語訳の公表と時期的に重なっていると見られる。要するに、明治 40 年代はイプセンの日本での受容が隆盛を極めた時期と見てもよかろう。今回検討する作品順に、各作家のイプセンとのかかわりを以下に見よう。

2.1 蘆花とイプセン

トルストイを訪ねて明治 39 年に帰国した後の蘆花は、トルストイから教えられた「土とともに生活すること」を実行し、始めた田園生活のスケッチとして『みみずのたはこと』(大正 2)を書いた[19]。その『みみずのたはこと』[20]の「梅一輪」でイプセンに触れている。

---

[15]同前掲中村都史子論文 P67

[16](1972)『鷗外全集』第 14 巻岩波書店 P641 では、「近代劇協會の委嘱により大正二年(一九一三)十月十六日に譯出され、同年十一月十三日、「解題」を付して、警醒社から單行本として發行された」とある。

[17](1994)『平塚らいてう作家の自伝 8』日本図書センターP101

[18]同前掲平塚らいてう書 P101 に「高安月郊「イブセン社会劇」(明治三十四年十月)、桑木厳翼「イブセンのノラに就きて」(丁酉倫理・明治三十八年七月号)、島村抱月訳「ノラ」(早稲田文学・明治三十九年十一月)、長谷川天渓「自然主義」(明治四十一年七月)島村抱月「近代文芸之研究」(明治四十二年六月)、島村抱月訳「人形の家」(早稲田文学・明治四十三年一月号)、島村柳水「個人としてのイブセン」(早稲田文学・明治四十三年七月)、坪内逍遙「近世劇に見えたる新しき女」(早稲田講演・五・六・七号)、相馬御風「ノラといふ女」(読売新聞・明治四十四年八月十三日)、島村柳水「イブセンの遺稿より見たる人形の家」(早稲田文学・明治四十四年九月号)、坪内逍遥「「人形の家」について」とある。

[19]福田清人編・岡本正臣著(1988・1967)『徳冨蘆花』清水書店 P164

[20]同前掲岡本正臣著 P172 では、「ひとりの克己主義者から、ひとりの快楽主義者に転身した。ここに蘆花の新しい自由な天地があった。『みみずのはたこと』が自然主義風でも『白樺』風でもない独自の清新さと、自在なユーモアを持っている理由がここにある」とある。

airiti

作品中、アメリカにいる葛城という人物は、日本にいる恋人お馨に「イブセンを読む可く」（P261）と思って送った。しかし、「従順にイブセンを読んだ」（P261）お馨は、「葛城が堕落に向いつゝあるもの」（P261）と考え、「自身亜米利加に渡って葛城を救わねばならぬと覚期した」（P261）ほどであった。この記述を見ると、イプセン思想は人を墮落させる危険なものと表象されていたことが分かる。結局、お馨は家族の強い反対を押し切り、アメリカ行きを実現させた。アメリカに着いてニューヨークの病院で働くようになり、「風土やら食物やら万事が変った」（P269）ため、「病は敗血症と腸炎の併発」（P281）のため、お馨は急死した。「人生最高の理想を追い、之れが為めに戦い、戦い半ばならずして斃れし英雄の生涯也」（P282）と恋人の葛城はお馨の一生を高く評価している。このようにイプセンの思想を危険視したお馨は「新しい女」とは言えないが、自己の意志でアメリカ行きを実現させ、家族、友人思いのお馨は理想的な女性像であり、新時代においても必ずしも「新しい女」になる必要はないという選択の余地を蘆花は明確に提示したのではないか。

「自己を割合に深く知り、且つ新しい知識を積むことを怠らない」[21]と花袋に褒め称えられた蘆花の自伝的小説『思出の記』（明治33.3.23-34.3.21）、『黒い目眼と茶色の目』（大正3.12）を検証した限りでは、聖書[22]、伝教師の伝記[23]、ショッペンハウエル、ハアトマン[24]、ドン・キホーテ[25]に触れたことはあっても、イプセンに関した部分はほとんど見当たらない。

2.2 花袋とイプセン

花袋の『東京三十年』（大正6）には、イプセンに関する記述が多く見られる。まず、イプセンが日本に入って来た時期を、「明治三十六年十月三十日」[26]の「紅葉の病死の頃」[27]より後のこととしている。

---

[21](1995)「作家の短評」『田山花袋作家の自伝25』日本図書センターP142
[22](1969・初1966)「思出の記」『日本現代文學全集17 德冨蘆花集』講談社P98
[23](1969・初1966)「思出の記」『日本現代文學全集17 德冨蘆花集』講談社P99
[24](1969・初1966)「思出の記」『日本現代文學全集17 德冨蘆花集』講談社P163
[25](1969・初1966)「黒い眼と茶色の目」『日本現代文學全集17 德冨蘆花集』講談社P225
[26](1995)「紅葉の病死」『田山花袋作家の自伝25』日本図書センターP116

airiti

それに、「イブセンのあの深い象徴を透して見た人生」[28]、「イブセンの反抗」[29]から感銘を受け、イプセンの作品を「世紀末の苦艱の形が名残なくあらわれ」[30]、新思潮に対面する点において、「イブセンの『建設師』や『ボルクマン』のことが犇と胸に迫った」[31]としている。花袋は、柳田国男[32]とも島崎藤村[33]ともよくイプセンについて語り合っていた。さらに、「イブセンソサイチイ」と言ったイプセン勉強会に集まった若者で、『幽霊』、『鴨』、『小アイオルフ』、『ロスメルスホルム』などのイプセンの作品に関して盛んに議論[34]したことが記述されている。また、「丁度 0 君の主唱する自由劇場の開園の準備近く」[35]という記述に示唆されたように、イプセン勉強会が小山内薫による『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』初演の明治 42 年より前に成立していたことが推測されよう。以上に挙げたイプセンに関する記述からは、花袋はイプセンを熟読したと言ってもよかろう。一方、小説『蒲団』では、師竹中時雄は「イブセンのノラの話」(P13)を聞かせて、女弟子の横山芳子を「教育ある新しい女」(P34)に教育しようとした。ノラの形象を借りて芳子の造型をしようとする花袋の意図は明確である。

2.3 鷗外とイプセン

瓜生研二は、従来の鷗外のイプセン受容の問題を扱った諸論説を纒め、鷗外のイプセンの受容を 3 時期[36]に図式した上、さらに諸論説の主張が異なった明治 40 年代以降の鷗外のイプセン観に注目し、「三層に分かち得る重層的な構造を有している」[37]という立場を取

---

[27](1995)「丸善の二階」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP120
[28](1995)「丸善の二階」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP119
[29](1995) 「丸善の二階」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP120
[30](1995)「私のアンナ・マール」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP160
[31](1995)「四十の峠」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP233
[32](1995)「郊外の一小屋」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP125-127
[33](1995)「小諸の古城址」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP137-138。特に P137 では、「イブセンは殊に深く島崎君を動かしたらしかった」とある。
[34](1995)「イブセンソサイチイ」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP209
[35](1995) 「イブセンソサイチイ」『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センターP210
[36]同前掲瓜生研二論文 P25 では、明治二十年代の「食わず嫌いの時代」、明治三十年代の「本格の摂取の時代」、「位置付けを行った時代」の 3 時期に分けている。
[37]同前掲瓜生研二論文 P25

airiti

り、イプセン初期の理想主義に貫かれている浪漫劇に対して肯定的評価を、中期の問題劇に対して否定的で冷淡な態度を、晩年の神秘的な劇に対して共感乃至観照的態度を、それぞれ示している[38]と分析している。

その中で、鷗外がイプセン戯曲[39]を翻訳し、日本へ広げることに力を惜しまなかったことは特筆すべきである。例えば、小山内薫による『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』(明治 42.7-9)の初演は、鷗外の脚本の訳[40]をなくしては、その成功は收められない。また、「自己中心主義としての個人主義精神の主張としての『人形の家』への反感」[41]を持っている鷗外とは言え、『人形の家』の初演後、詳しいイプセン紹介の「解題」を付けて、『ノラ』[42]を大正 2 年(1913.11)に翻訳、刊行した。好悪はともかく、西洋文化を日本に取り入れようとする鷗外の姿勢が覗かれよう。

日本の新しい女に大きな影響を与えた『人形の家』に触れたノラの家出のことであるが、「解題」の冒頭で鷗外は、「女子問題が次第に痛切に人に迫つて解決を促すに至つたのには、人形の家の作者も與つて力がある」と(P443)と意見を下した後、イプセンが辿った経歴、思想的遍歴に触れ、「發言權を女子に與へようとする提議が否決せられ」(P448)たことを背景にイプセンの『人形の家』の創作動機を述べている。最後に、「通篇飽くまで自然らしく出來てゐて、人にいかにもかうだつたかと思はせるばかりではなく、必ずかうだつた

[38]同前掲瓜生研二論文 P25
[39]鷗外の訳によるイプセンの劇作は、『牧師』(部分訳、1903)『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』(1909)、『幽霊』(1911)、『ノラ』(1913)の 4 作である。
[40](1972)『鷗外全集』第 5 巻岩波書店 P651 では、「明治四十二年(一九〇九)七月六日から九月七日まで途中九回の休載にあったが、五十五回にわたって『國民新聞』に「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」と題し、「森林太郎譯」として連載され、(中略)自由劇場の旗上興行のために譯されたのである。すなわち、明治四十二年十一月二十七日、八日の兩日、ボルクマンを市川左團次が演じ、有樂町において上演された」とある。この辺りの事情は小説『青年』(1910)の中に主人公小泉純一が坂井夫人に出会った場面として取り扱われている。
[41]同前掲中村都史子書 P20
[42](1972)『鷗外全集』第 14 巻岩波書店 P641 では、「近代劇協會の委嘱により大正二年(一九一三)十月十六日に譯出され、同年十一月十三日、「解題」を付して、警醒社から單行本として發行された」とある。

airiti

に違ないとさへ思はせる」(P450)と述べた後、冒頭部分と呼応するように、鷗外は「これを讀み、これを看て、げにさもあらうと首肯すると否とは、個々の人の判斷に一任する外無い」(P450)と『人形の家』を突き放しているように述べている。ここから鷗外の非難が読み取れようが、日本社会でもノラのような自立的な女性が決起しようとするブーム[43]になるだろうとも仄めかしている。要するに、各時期の個人の好悪を別に、イプセンに相変らぬ関心を寄せ、「イプセン移入紹介時代」に紹介役をつとめ、第2期「イプセン流行時代」にイプセン論を多く発表したと言えよう。

2.4 漱石とイプセン

漱石とイプセンとの関係は早くから漱石研究者の間で注目されてきた。例えば、三好行雄編『夏目漱石事典』[44]は「イプセン」の項目を設けて、漱石とイプセンとのその相関資料を提示しているが、イプセンと漱石との創作関係については、あまり具体的記述はない。明治40年前後に変化が起こった漱石の文学観から漱石が「何かに出会った」と平岡敏夫[45]は指摘し、真の重視、人間心理に対する関心への傾斜、小説の構成などの変化は漱石のイプセン受容によるものであることを立論しようとする藤本晃嗣の論文[46]もある。藤本晃嗣は、「新しい女」の出現と深く関わった『人形の家』を漱石がイギリス留学中に購入して読んだ[47]と主張し、「『坑夫』執筆開始前後に漱石が、急速にイプセンの作品を読んでいる」[48]と考えている。また、

---

[43]同前掲南谷覺正論文 P200 では、「ノーラのトルヴァルとの8年に及ぶ結婚生活の分析には真実の響きがあり、これが世界各地で女性解放の烽火の役割を果たしたというのも納得がいく」とある。

[44]三好行雄編(1990)「イプセン」『別冊國文學夏目漱石事典』39 号學燈社 P248-249

[45]平岡敏夫(1983・1976)「「消えぬ過去」の物語」『漱石序説』塙書房 P27 では、「「虞美人草」から「坑夫」(明治 41.1-4)を経て「三四郎」、「それから」に至る道程はたしかな変貌であるのに、その理由は明確にされているとはいいがたい。そのことをいまもなお明らかにすることは困難であるが、漱石は何かに出会ったのだ」とある。

[46]藤本晃嗣(2009)「漱石のイプセン受容をめぐって―明治四十年前後の漱石の文学観との関連から―」『九大日文』九州大学日本語文学会

[47]同前掲藤本晃嗣論文 P5

[48]同前掲藤本晃嗣論文 P5。なお、藤本晃嗣の論文で明らかになったことだが、漱石が読んだと推測されるイプセンの著作は、『ヘツダ・ガブラー』、『社会の柱　他』、『人形の家』、『棟梁ソルネス』、『小さなエイヨルフ』、『私たち死んだものが目覚めたら』、『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』、『ロスメルスホルム・海の夫人』9作品である。前4作

airiti

評論、講演などでのイプセンへの言及は、凡そ 16 箇所[49]あり、ほぼ明治 39 年から明治 41 年頃に集中している[50]という。それについて藤本晃嗣は、その時期において漱石が談話や講演の機会が多かったことを要因として考えたが、前述の明治期の日本におけるイプセンの受容に照らしてみると、それは第 2 期「イプセン流行時代」に当たり、明治 39 年のイプセンの死去をきっかけに盛り返したイプセン熱[51]と深く関連していると見るべきであろう。言い換えれば、盛り返したイプセン熱を背景に漱石はイプセンの著作を多く読み、談話、講演、小説を通してイプセン観を日本文壇に披露したのである。

『漱石全集』を読んだ限りで、イプセンに直接に言及した小説、随筆、談話、講演などを時間順に表(1)に整理した。

表(1)漱石がイプセンに関する発言リスト

年代	小説・随筆	談話、評論、序文、講義、講演
明治 39 年	3.小説『草枕』（明治 39.9『新小説』9 巻）	1.談話「夏目漱石氏文学談」（明治 39.8『早稲田文学』8 号） 2.談話「文学談」（明治 39.9『文芸界』5 巻 9 号） A 鈴木三重吉への手紙 B『漱石全集』第 13 巻 P202「斷片明治三十九年」 「イブセンは自己ノ為メニ生存セル人ナリ」
明治	4.小説『野分』（明治	

品をイギリス留学中、購入し、読書した。後 5 作品を、明治 39 年頃購入し、明治 40 年頃読書した。

[49]同前掲藤本晃嗣論文 P5-6

[50]同前掲藤本晃嗣論文 P6

[51]金子幸代(2006)「日本近代劇再考Ⅲ―イプセン劇と鷗外の「歌舞伎」―」『富山大学人文学部紀要』44 富山大学人文学部 P94

airiti

40 年	40.3『ホトトギス』10 巻 4 号)	5.評論「文藝の哲學的基礎」(明治 40.5.4-6.4『東京朝日新聞』)
明治 41 年	11.小説『三四郎』(明治 41.9.1-12.29『東京朝日新聞社』)	6.講義「文學論」(明治 40.5 大倉書店、明治 36 から明治 38 年にかけての東京帝国大学での講義) 7.序文「高濱虚子著『鶏頭』序」(明治 41.1『東京朝日新聞社』) 8.談話「愛讀せる外國の小説戯曲」(明治 41.1.1『趣味』) 9.評論「創作家の態度」(明治 41.4.1『ホトトギス』) 10.談話「近作小説二三に就て」(明治 41.7.15『新小説』) 12.談話「文學雑話」(明治 41.10.1『早稲田文學』)
明治 42 年		13.談話「予の描かんと欲する作品」(明治 42.2.1『新潮』)
明治 43 年	14.随筆「思ひ出す事など」(明治 43.10.29-44.2.20『東京朝日新聞』)	
明治 44 年		C『人形の家』初演を見た後に書いた日記(明治 44.11.28)
明治		15.談話「ノラは生るゝか」(明治

airiti

45 年		45.2『国民雑誌』)
大正 2 年		16.講演「模倣と獨立」(大正 2.12.12 第一高等學校に於て)

時間順に並べた表(1)を見ると、1 番の談話「夏目漱石氏文学談」(明治 39.8)は、漱石がイプセンに言及した最初の資料として見るべきだが、明治 36 から明治 38 年にかけての勤務先の東京帝国大学での講義を纒め、明治 40 年 5 月に出版した『文學論』では、「吾人は彼が非凡なる技倆を以つて作中の人物を一々に書き分けたる明晰なる解剖力に一驚を喫すべき」[52](P225、下線部分論者による。以下同様である。)だと触れた。現存資料の中で、漱石がイプセンに言及したものはこれが最初だと言えよう。そこで漱石は「非凡なる技倆」、「明晰なる解剖力」を持つイプセンを高く評価している。

その後、13 番の「予の描かんと欲する作品」(明治 42.2)で漱石自身が「イブセンを能く引き合ひに出すやうであるが」[53]と断ったように、ややともすれば、すぐイプセンを例に出したがる傾向がある漱石の様子からは、漱石が明治 39 年から明治 42 年に至るまでの時期イプセンの書物を熟読していたことは明らかである。

イプセンへの言及は明治 41 年に集中しており、イプセンに関する最後の講演「模倣と獨立」では、イプセンが生きた時代背景を「女と云ふものは眼中に置かないで、強い男が自分の權力を振り回す為に自分の便利を計る為に、一種の制裁なり法則と云ふものを拵へ」(P417-418)たとした。これは前述のノラ訳の「解題」で鷗外が述べた意見と一致している。男が作った法則への反動として、「最も著しい例は、ノラと云ふやうなものであります。夫がイブセンと云ふ人は人間の代表者であると共に彼自身の代表物であると云ふ特殊の點を發揮して居る。イミテーションではない。今迄の道德はさうだから、たとひ其道德は不都合であるとは考へてゐても、別に仕様がな

[52](1975・初 1966)『漱石全集』第 9 巻岩波書店 P225
[53]談話「予の描かんと欲する作品」(1976・初 1967)『漱石全集』第 16 巻岩波書店 P613

airiti

いからまあ夫に從つて置かう、と云ふやうな餘裕のある、そんな自己ではない。もつと特別な猛烈な自己である。夫が為イブセンは大變迫害を受けたと云ふ譯であります。無論事實不遇な人であります」(P418)と、男性原理で女性を制御する男性中心社会に立ち向かって、女主人公ノラを提示し、女性の自立を創作で宣揚したイプセンの理念を漱石は見抜いたと言えよう。要するに、イプセンの受容の第2期「イプセン流行時代」と相俟って、イプセンを自作にちりばめるようにし、イプセンの理念、哲学、思想を日本国民に開示した姿勢には漱石の時代感覚に対する叡知が窺われよう。

2.5 イプセンと日本の新しい女

日本の「新しい女」が『青鞜』に代表され、イプセンのノラが深く関係していることは、今はほぼ定説となっているが、例えば、「本社は女子の覚醒を促し、各自の天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を生まんことを目的とす」[54]ことを第一条として掲げた『青鞜』の創刊号[55](明治44.9)が、『人形の家』の日本での初演[56]と重なっていたことはよく注目されている。とは言え、『青鞜』(明治44.9－大正5.2)を主宰する平塚らいてう自身に言わせれば、「『青鞜』という雑誌そのものからして、婦人の社会的自覚を促すとか、婦人の解放運動のためとか、そういった意味のはっきりとした目的のもとに創刊されるものではなく」[57]、「日本の婦人解放運動に重大な影響を与えようとは、当時は夢にも思っていなかった」[58]が、「婦人解放運動の推進力としての一つの使命をもって働きをはじめるのは事実」[59]になった。とは言え、金子幸代は、『青鞜』の特集号から、「ノラの家出の深意は、自覚的に生きようと模索する青鞜の社員の間で

[54](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP79
[55](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP85では、「社会の冷笑と好奇心に迎えられ、多くの未知の女性たちの夢と望みの中に乗りだしました」と『青鞜』の創刊当時の状況が説明されている。
[56](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP100では、「イブセンの『人形の家』が一つの婦人問題、社会問題として、人々の魂をゆり動かしたから」と、ノラの人気が圧倒的になった理由を述べた。
[57](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP92
[58](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP92
[59](1994)『平塚らいてう作家の自伝8』日本図書センターP94

airiti

も一九一一年(明治四四)当時は理解しがたかった」[60]と読み解いている。その一方で、ノラの家出に最初は否定的な見解を持った平塚らいてうには、その後エレン・ケイの『恋愛と結婚』(大正 2.1)を翻訳連載するようになってから女性問題への関心の深まりが見られる[61]と金子幸代は指摘している。『青鞜』は、第三次桂内閣(明治 45.12.21－大正 2.2.20)が「婦人の解放的気分が日本の家族制度に影響することを恐れ」[62]たことで「家族制度破壊と風俗壊乱」を理由に発禁命令を受けたことが度々ある。総じて言えば、『青鞜』の発行は、ノラを意識したわけではなく、あくまでも結果的にノラと『青鞜』との相乗効果が「新しい女」のブームを引きおこしたと言えよう。また、平塚らいてうの話[63]によると、鷗外夫婦は『青鞜』社の運動を支持していたという。日本女子大学在学中(明治 36.3-38.3)、「イブセンの『ノラ』をはじめて読んだ」[64](P43) 平塚らいてうは、イプセンが日本で引きおこした流行について、「文壇に自然主義運動と共に自我尊重の徹底個人主義が唱えられ、イブセンの作品などが青年の心を捉える」[65]と見ている。日本で婦徳に反すると見られるノラの家出は、石塚浩司によって「近代的自我の覚醒」[66]と評価されている。いずれにせよ、イプセン劇のノラは歴史上、世界的な女性解放の口火を切った代表的人物である点は揺るがし得ない。日本においても、その受容がその後の女性の地位の向上を求める動きに繋がっていったと言える。

---

[60]金子幸代(2004)「『人形の家』上演研究序説―「女子文壇」と「青鞜」を視座として―」『富山大学人文学部紀要』40 富山大学人文学部 P263
[61]同前掲金子幸代「『人形の家』上演研究序説―「女子文壇」と「青鞜」を視座として―」論文 P262
[62](1994)『平塚らいてう作家の自伝 8』日本図書センターP123
[63]平塚らいてう(1962)「鷗外夫妻と『青鞜』」(1992)『群像日本の作家 2 森鷗外』小学館 P112 では、「鷗外先生は「青鞜」社の運動に対して、またわたくしに対して最初から深い関心をもたれ、いつも同情的に見ていてくださいました、奥さんは青鞜社の最初からの賛助員であり、創刊号に、またその後もたびたびではありませんでしたが短いものを寄稿して下さっていました」とある。
[64](1994)『平塚らいてう作家の自伝 8』日本図書センターP43
[65](1994)『平塚らいてう作家の自伝 8』日本図書センターP97
[66]石塚浩司(2000)「近代劇におけるメタ・パフォーマンス」『国際文化論集』21 桃山学院大学 P113

airiti

３．明治末期の小説に描かれた嫁たち

日本におけるイプセン受容の時代背景が浮き彫りにされたところで、以下、研究対象とした明治期小説における嫁の形象と姑との力関係を分析する。

3.1 蘆花の『不如帰』の嫁

日清戦争前後を背景に書いた『不如帰』[67]には、『半日』と同じく姑嫁不和が描かれている。「海軍少尉男爵川島武男」(P8)は、「貴族院議員子爵加藤俊明氏の夫人」(P23)を媒酌人に、「陸軍中将子爵片岡毅として名は海内に震へる将軍の長女浪子」(P8)と結婚した。家柄から見れば、川島家と片岡家との婚姻は、釣り合いが取れたものである。嫁の浪子が川島家に嫁いでから、姑は、「浪子を愛せぬまでも悪めるにはあらざりき。浪子が家風、教育の異なるに関らず、成る可く己を棄てて姑に調和せむとするをば」(P57)を知り、姑嫁の不和には至らなかった。しかし、浪子が肺結核に罹ったことを聞いた時から、「大事な主人の卿も、の、大事な家嫡の子供も、肺病持なツて、死んでしまうて見なさい、川島家はつぶれぢやなツかい」(P60)を理由に、姑は息子武男に浪子との離婚を強要した。それに応じない武男に母はさらに「此様な例は世間に幾多もあります。家風に合はンと離縁する、子供が無かと離縁する、悪い病気があつと離縁する。此が世間の法、喃武どん。何の不義理な事も不人情な事もないもんぢや」(P61)と世間の通例を引き合いに、「妻の肩ばツかい持つて親の云ふ事は聞かん奴、不孝者ぢやなツか。親が育てた体を粗略にして、御先祖代々の家を潰す奴は不孝者ぢやなツか。不孝者、武男、卿は不孝者、大不孝者ぢやと」(P62)と、明治政府が価値を置く大義名分の「孝」を取り出して息子武男の弱点をついて説教したが、武男は離婚を拒んだ。結局、武男が日清戦争に行っている間に姑は人を間に立て、浪子の父に離縁の話しを直接に持ち出してもらい、

[67](1969・1966)瀬沼茂樹「作品解説」『日本現代文學全集 17 德冨蘆花集』講談社 P391 では、作者と関連して「弱者である女性への同情、キリスト教主義にやしなわれたフェミニズムが強く働ていたにちがいない」とある。

airiti

浪子の父は、「宜しい。分ました。畢竟浪が病気が険呑ぢやから、引き取つて呉れと、仰有るのぢやな。宜しい。分いました」(P69)と、名門でありながら娘の病気を認めて離縁の話しを受け入れざるを得なかった。このように中島家の母も片岡家の父も浪子の肺結核の病気は離縁が成立する正当な理由であると見ている点で見解が一致している。その一方で、中島家で働いている中働と小間使は「本当にしどいね。何処の世界に、旦那の留守に奥様を離縁しちまふ母様があるものかね。旦那様の身になつちやア、腹も立つ筈だわ。鬼婆め」(P74)と夫の留守中に嫁を離婚させた中島の姑を批判したが、別に離婚が成立する不合理さを責めているわけではない。ここでは、いくら身分が高いとは言え、家の存続のために当時は治療法のなかった病気は離婚が成立する正当な理由だとする社会慣例に誰も逆らうことは出来なかったのである。結局、浪子は、「あゝ、辛い！辛い！最早――最早婦人なんぞに――生れはしませんよ。あゝあ！」(P114)と恨みを飲んで、この世を去って行った。このように『不如帰』に見られる「抑圧する姑対抑圧される嫁」の構図は、明治時代では名門のお嬢さんの嫁でも「病気」で「家」に存続の危機をもたらす場合、姑が家督権者の息子に代って家父長権を執行し、嫁を「家」から追い出す正当性を認めていた社会的慣習を描き出している。同時に、現在はほとんど忘卻されているが、当時の社会では解決できなかった死病（結核）の存在を伝えている。

3.2 花袋の『生』の嫁たち

『生』で描いた明治 30 年代の吉田家は、『不如帰』の川島家のような上流階層ではなく、長男が「下級官吏」(P63)で「貧しい家」(P63)であるが、夫を失った未亡人の姑がいる点では『不如帰』と同じである。

回りの人に「難しい」(P56、P60、P61、P65、P99)人だとされた姑が同居する吉田家では、長男の嫁を 3 回ももらった。「初めの嫁は初子の産褥で倒れてしま」(P59)って、「子癇」(P95)で亡くなった。生存中、吉田家では、「姑の悪い機嫌、絶えずその衝突に胸を痛め」

airiti

(P96)ていた。2 人目の嫁は、不注意で引き起こした「生児の死」(P62)を理由に離婚された。「実家の親戚からも強硬なる態度の談判が続く」(P63)が、2 人目の嫁は離婚される運命から逃れられなかった。そして、3 人目の嫁の婚礼の手伝いに来た親戚に、「今度の嫁さんだって、またきっと酷められるにきまっているからね」(P65)と予告されるように、3 人目の嫁も姑に「夫婦の愛情を少しでも表面に顕わすと、すぐ厭な眼で睨まれ」(P100)たり、「難しい口小言と衝突と暗闘とにあたり月日を送っ」(P164)たりした。嫁の大変なことを近所の人にも見抜かれて、「辛抱なさいよねえ」(P101)と慰められた。このように、貧乏な家の吉田家でも、「自己が忍耐したような絶対の服従」(P92)を嫁に要求する姑がいる限り、「抑圧する姑対抑圧される嫁」というう姑と嫁の不和の構図が続くのである。このような嫁の危機は姑の死によって解放される。嫁の「一人は死し一人は離縁した先妻を気の毒に思った」(P164)長男が母の死後、3 人目の嫁に「これからは楽が出来るから」(P164)と言った通り、吉田家は「賑やかな笑い声」(P165)が聞こえるようになったのである。以上からは、先に見た死病の存在と同時に、出産と育児が当時の女性にとって大きな問題であったこと、また姑の死により核家族的形態になって初めて一家が安定したということが窺える。

3.3 鷗外の『半日』の嫁

今まで見てきた「抑圧する姑対抑圧される嫁」の 2 例とは異なり、作中時間を孝明天皇祭(明治 42.1.30)の当日にした『半日』では、「抑圧される姑対抑圧する嫁」の構図が見られる。高山家の嫁は「大審院長」(P462)、「財産家」(P472)を父に持ち、母、月給を小遣いに自由に使える兄夫婦という家族構成の上流家庭の実家で育てられた。「おや、まだお湯は湧かないのかねん」と声だけが聞こえ、直接に作品中に登場していない姑に「まあ、何といふ聲だらう。いつでもあの聲で玉が目を醒ましてしまふ」(P460)という厭味を口に出させる嫁は、言葉数を見ても姑より上位を占めているように思われる。また、「奥さんは此家に來てから、博士の母君をあの人としか云はな

airiti

い。博士が何故母さまと云はないかと云ふと、此家に來たのは、あなたの妻になりに來たので、あの人の子になりに來たのではないと答へることになつてゐる」(P463)という嫁の論調を聞くと、驚かない人はなかろう。「（夫の母が・論者注)いつそ死んでしまへば好いと思ふ。かう思つて、自分で怖ろしい事を思ふとも何とも感ぜぬのを不思議に思」(P475)う恐ろしい嫁であり、「嫌な事はなさらぬ。いかなる場合にもなさらぬ。何事をも努めて、勉強してするといふことはない」（P462)とされる自己中心的人物とも言えよう。作品中、高山が回想した「娵さんは此内に來て、婚禮の日に親類の杯をして時お辭儀をした切で、お辭儀といふものをした事のない人だ。餘所へ往かうが、歸つて來ようが挨拶をした事はない。そこへ往つてわたしが頭を下げるのはいかにもつらい。あんな人でさへなければ、娵さんに會計を渡すのは、貰はない前からの覺悟なのだから、とうにこつちから進んで渡してしまふのだ。その上來た當分の娵さんは、會計などをしようといふ風ではなかつた。今でもわたしのした方が、物いりは半分で濟む」(P476-477)」姑の言葉のように、姑が意地を張って会計を渡さないという以外に、姑からの嫁に対する圧迫や反撃は一度も描かれていない。こうして高山家の昂ぶった嫁の態度を見ると、同時代の作品の中でも特異に見え、「東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」(P482)と夫から最大級の非難を向けられたのも筋道が通っていると言えよう。「あらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物」から生まれた「新しい女」と連想される嫁との不和は、未解決のままで作品が終わってしまった。必要な場合、嫁は、離婚を考えているが、「二度目では大學教授位の人を夫に持つことはむつかしいかも知れぬ」(P475)という大学教授という社会的地位へのこだわりがあり、踏み切れない。結局、姑に対する嫁の強い態度が改まらない限り、「いつそ死んでしまへば好い」(P475)という嫁の望みが暗示するように、『生』と同じく姑が亡くなるまで高山家の家庭紛争は続くであろう。

airiti

『半日』の嫁には、明治社会育ちの「新しい女」の登場が明白に読み取れよう。

3.4 漱石の『行人』の嫁

作中時間と発表時間とがあまり変わらない『行人』では、7人も家族(父長野、母お綱、一郎、直、孫芳江、二郎、娘お重)が同居している。そうした大家族は漱石の小説の中では珍しい。長野家の嫁直の実家の階層ははっきりと描かれていないが、嫁直が秋彼岸の墓参りの帰りに二郎の下宿によった場面にある「上り口に待つてゐた車夫の提灯には彼女の里方の定紋が付いてゐた」(P641)という記述を参考に見ると、車夫も抱えており、提灯に定紋が付いていることから、直の実家は、中流階層以上の家柄だと推測されよう。

長野家の嫁として、直が大抵姑と共に「裁縫其他の手傳いをして日を暮らしてゐた」(P594)という様子から見れば、家の会計はまだ嫁に任されていないと推測されよう。そして、夫の一郎が家に帰ってくると、娘を連れて、「不斷の和服を持つて上がつて來る」(P597)。それが姑に言われて、習慣にしているところから見れば、家庭内では姑の指示に従って行動している。風呂に入る順番ははっきりと書かれていないが、少なくとも主人の一郎より先に娘と風呂に入った描写が2回(P542、P598)あったことから、長野家では姑の権威が絶対的なものではないことが分かる。ただし、嫁の直は「一體直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同なじ調子だがね」(P451)と、愛嬌のないように姑に見られている。これは、結婚前から嫁直と知り合いだった(P581)二郎[68]の目からは、「決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を與へると、温め得る女であつた。持つて生まれた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で隨分愛嬌を搾り出す事の出來る女であつた」(P450)と見えたことと大した違いはない。特に二郎が「腹が立つ程の冷淡さを嫁入後

[68](1975・初1966)『漱石全集』第5巻岩波書店P581では、「御母さんの前ですが、兄さんと姉さんの間ですね。あれには色々複雑な事情もあり、又僕が固から少し姉さんと知り合だつたので、御母さんにも御心配を懸けて濟まない樣ですけれども、大根をいふとね」の描写による推測。

airiti

の彼女に見出した事が時々あつた」(P450)ことから、直の冷淡は、結婚前よりも深刻となっていることが分かる。「自分が何うあつても女の靈といふか魂といふか、所謂スピリツトを攫まなければ満足が出來ない。それが何うしても自分には戀愛事件が起らない」(P468)と思う学者一郎は、当然このような冷淡な嫁直に満足できそうもない。一方、夫の一郎に「スピリツト」を求められる嫁直は、「男は厭になりさへすれば二郎さん見たいに何處へでも飛んで行けるけれども、女は左右は行きませんから。妾なんか丁度親の手で植付けられた鉢植のやうなもので一遍植られるたが最後、誰か來て動かして呉れない以上、とても動けやしません。じっとしてゐる丈です。立枯になる迄凝としてゐるより外に仕方がないんですもの」(P640)と告白したように、嫁になった以上、たとえ結婚に不満があっても、ただその家庭に縛られ、受動的にじっとしているしかないという諦念を持っている。

『行人』に記述された姑と嫁との関係は、前述の3作ほど悪化していないが、家督を長男一郎に引き渡そうとする長野家だが、実権が相変らず姑の手に握られているため、どちらかと言えば、嫁より姑の方が上だと言えよう。ただし、『行人』では、「嫂を嫌つてゐた」(P554)小姑のお重[69]との対立関係が絡んでいるから、前述の3作よりも姑嫁、小姑嫁の家庭事情は少々複雑になったことを付け加えたい。

以上、代表的な明治期小説に描かれた姑嫁関係を見てきた。『半日』以外の3作品では、姑が家庭内で相変らず嫁よりも権威を持ち、「強い姑と弱い嫁」のように造型されている。しかし、今までの認識を逆転した『半日』では、「強い嫁と弱い姑」となっているのである。このように、『半日』での嫁の形象は、同時代の嫁の形象から際だっていることは確かである。とは言え、『半日』の結末で、「東西

[69](1975・初1966)『漱石全集』第5巻岩波書店P554では、小姑のお重が嫂直を嫌う理由を「學究的に孤獨な兄に同情が強いため」だとされている。また、P556では、「此冷かな嫂からふんといふ顔付で眺められるのが何より辛いかつたらしい」とある。

airiti

の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」(P482)とまで鷗外が書く必要があるであろうか。

『半日』と同じ年に書いた、明治 40 年代に隆盛を極めた自然主義への鷗外の批判が多く見られる『追儺』[70](明治 42)では、「僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いてもよいものだと斷案を下す」(P588)と記した上、「今の自然派の小説を見れば、作者の空想はいつも女性に支配せられてゐるが、あれは作者の年が若いからかと思ふ。(中略)矯飾して言ふのではない。矯飾して、それが何に用に立つものか」(P590)と所感を述べた鷗外は、無論「矯飾して言ふ」技巧を駆使しようとするはずはなかろう。敢て「矯飾して言ふ」自然主義風の気取った言い方に思われることを恐れずに、「東西の歴史は勿論、小説を見ても、脚本を見ても、おれの妻のやうな女はない。これもあらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」(P482)と、『半日』の嫁の風変わりを強調したことは、同時代の嫁の形象と大きく異なっている点は確実であり、同時代に先駆けて「新しい女」の出現を先取りし、その前兆を同時代に告知したものと見てもよかろう。

４．結論

イプセンのノラを視座に明治末期の代表的な小説を検討してきた。確かに藤木宏幸が纒めたように、イプセンの死去によって、当時の日本は「イプセン流行時代」(明治 39 年－大正初期)となったが、現時点での資料によると、日本の知識人にイプセンの書物が流行り、広く読まれたのは、明治 36 年ぐらいからである。イプセンがきっかけとなった自立的女性への認識が明治 39 年以後の日本では広まることになった。しかし、その中で、とりわけ外遊から日本に帰った蘆花の『みみずのたはこと』では、イプセンの思想を危険視して墮

[70] (1972)『鷗外全集』第 4 巻岩波書店

airiti

落に繋がる源を阻止しなくてはならないと思う女主人公お馨は、アメリカ行きを決意する強い一面を持つと同時に、家族、親友、恋人思いの婦徳を兼ねた優しい一面を持つ女性である。新旧の美徳を合わせ持ったお馨の造型は、ノラ風の女性を批判するまでには至ってはいないが、「新しい女」には同調しない、別な生きる道があることの表出であろう。

「新しい女」に同調するにせよ、同調しないにせよ、新聞メディアを媒介として世間に公開された『不如帰』(『国民新聞』掲載)、『生』(『読売新聞』掲載)、『行人』(『朝日新聞』掲載)から見た嫁は、通説の通り、弱い立場に立たされ、姑に抑圧された存在である。こうして見ると、鷗外の家庭事情の特殊性と絡んでいたかも知れないが、『半日』で姑を抑圧した嫁は、それほど世間では普遍的ではなく、特異に見えると言わざるを得ない。同時代の作品の嫁と比較してみると、「あらゆる値踏を踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」(P482)という『半日』の嫁への非難の言葉は、実は「新しい女」の出現を予告したものと言えよう。国家から要求される「良妻賢母」と、姑が生きている間「声」のない順従な嫁を美徳とする慣例という、社会制度化された二重の束縛は、妻であり嫁である女性にとっては、この時代、たとえ「新しい女」が登場したとしても、相変らず強固で揺るがしがたい桎梏である。「新しい女」の出現によって社会的風潮は少しは変化したであろうが、明治時代の嫁たちにとって、家族制度で上位に位置づけられた姑との葛藤状態が消滅することはほとんどなかったであろう。明治期の日本の「新しい女」は、そうした葛藤状態の中で登場した一つの反作用であり、現実社会で嫁の置かれた立場は従来通りだったと言わざるをえない。

(当論文は台湾日語教育学会が主催した「2011 台湾日本語教育研究国際会議学術研討会」(2011.11.26)で発表したものを加筆、修正したものである。)

テキスト

airiti

(1974-1976・初 1965-1966)『漱石全集』全 17 巻岩波書店
(1970)『日本の文学 8 田山花袋岩野泡鳴近松秋江』中央公論社
(1972)『鷗外全集』第 4 巻岩波書店
(1981・初 1977)『筑摩現代文学大系 5 岩野泡鳴木下尚江徳冨蘆花集』
筑摩書房

参考文献

徳富健次郎(2001・初 1938)『みみずのたはこと』上岩波書店
(1969・初 1962)『日本現代文學全集 21 田山花袋集』講談社
(1969・初 1966)『日本現代文學全集 17 徳冨蘆花集』講談社
福田清人編・岡本正臣著(1988・初 1967)『徳冨蘆花』清水書店
(1972)『鷗外全集』第 14 巻岩波書店
(1973)『鷗外全集』第 26 巻岩波書店
平岡敏夫(1983・初 1976)『漱石序説』塙書房
日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大事典』第 4 巻講談社
(1980・初 1978)『筑摩現代文学大系 6 田山花袋國木田獨歩集』筑摩書房
三好行雄(1993・初 1978)『森鷗外・夏目漱石』筑摩書房
中村都史子(1981)「日本初演の「人形の家」」『梅光女学院大学論集』14 梅光女学院大学
瓜生研二(1985)「鷗外のイプセン観の構造」『比較文学・文化論集』1 東京大学比較文学・文化研究会
竹盛天雄編(1989)『別冊國文學森鷗外必携』學燈社
三好行雄編(1990)「イプセン」『別冊國文學夏目漱石事典』39 号學燈社
(1992)『群像日本の作家 2 森鷗外』小学館
(1994)『平塚らいてう作家の自伝 8』日本図書センター
(1995)『田山花袋作家の自伝 25』日本図書センター
(1996)最新版『漱石全集』第 25 巻岩波書店
中村都史子(1997)『日本のイプセン現象―1906-1916 年』九州大学出版会
中山和子・江種満子・藤森清編(1998)『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房
石塚浩司(2000)「近代劇におけるメタ・パフォーマンス」『国際文化論集』21 桃山学院大学
金子幸代(2004)「『人形の家』上演研究序説―「女子文壇」と「青鞜」を視座として―」『富山大学人文学部紀要』40 富山大学人文学部
南谷覺正(2006)「『人形の家』について―ジェンダー・イデオロギーと文学」『群馬大学社会情報学部研究論集』第 13 群馬大学社会情報学部
金子幸代(2006)「日本近代劇再考Ⅲ―イプセン劇と鷗外の「歌舞伎」―」『富山大学人文学部紀要』44 富山大学人文学部
藤本晃嗣(2009)「漱石のイプセン受容をめぐって―明治四十年前後の漱石の文学観との関連から―」『九大日文』九州大学日本語文学会
金子幸代(2011)『鷗外と近代劇』大東出版社

◇2012 年 4 月 30 日受理　2012 年 6 月 20 日審査通過